

植民地下ビルマにおける国民形成 —ビルマ語の成立および歴史・公民教育の普及の観点から—

本研究は、植民地時代から独立時期に至るまで、ミャンマー「国民」がどのようなプロセスを経て、またいかなるものとして形成されたかに関する研究である。国民形成は、国家の領域内の人々を均質な集団として統合することを意味する。その際、教育の果たす役割はきわめて大きい。たとえば、言語の領域では、画一的教育制度において国民語を教えることを通じて、国民は均質な集団へと組織化されていく。歴史教育や公民教育においても、同様の過程が見られる。

ミャンマーの2回にわたる国民形成は、ビルマ語を教育用語として用い、その言語を通じた教育によって行なわれた。ビルマ語を教育用語とする教育は、1921年から登場した「アミョーター教育」という民族教育から始められた。アミョーター教育により英領ビルマでは、多くの知識人がビルマ語を尊重するようになった。この影響によって、ヤンゴン大学の学生作家によって現代ビルマ語が作られ、この現代ビルマ語が今日まで多民族社会のミャンマーでは共通語として用いられているのである。また、ビルマ人を中心に構成される国民の均質化のため、アミョーター学校では歴史教育と公民教育が行われたのである。このように、独立期から今日に至る教育を通じた国民形成の過程を見ると、民族統合という政治思想を背景に、ミャンマーに住む多民族における国民形成が同様に行われている。

しかし、ミャンマーの国民形成に関する研究は、植民地・独立時代の政治史を中心に行われてきた。一方、上述したように、植民地時代と独立時代の教育を通じた国民形成過程の双方は、政治思想の変更にもかかわらず、方途において歴史認識と公民認識の共有による共通認識を通じて一つの「国民」として想像させていると考えられる。この研究に取り組む際の当初の私の仮説は、英領ビルマ時代からミャンマー独立国家の樹立にかけて行われた国民形成の要因は、アミョーター教育による現代ビルマ語の確立と、このビルマ語を通じて行われた両時期の歴史教育と公民教育にあり、それらによって形成された共通認識が人々を均質な集団として組織化したのではないかと、ということである。この仮説を説明するために、植民地時代の英領ビルマで行われたアミョーター教育による現代ビルマ語の確立、アミョーター学校の歴史教育と公民教育による国民形成、独立期における歴史教育と公民教育による国民形成を分析した。言い換えれば、本論文では、英領ビルマの植民地時代から独立直前までにかけて行われた教育を中心に、言語と歴史・公民教育による国民の形成を検討した。

第1章では、植民地時代からビルマ語が共通語として活用された背景を理解し、植民地時代の人々の分散状況を把握するため、主に英領ビルマの多数派であるビルマ人に着目しながら、先史時代からの人々の移動を簡潔に整理した。英領ビルマとなる地域の人々は現地の北にある中国を発祥の地としており、北から南へと徐々に移動してきたのである。このような先史から続く北から南への人々の移動は植民地時代まで続き、ビルマ王朝時代には

行政と治安を理由に、植民地時代初期には、経済制度の変更を理由に多くの上ミャンマーの人々が下ミャンマーへ移住した。植民地時代の国民形成時代には、植民地政府に指定された管区地域で多数派のビルマ人と他民族との混合が行われたのである。このような事情により英領ビルマの国民形成時代、言語的多様性が現実であった状況に対して、ビルマ語が共通語として構成されたのがわかる。

第2章では、植民地時代と独立期の国民形成過程を理解するため、植民地時代に起きたナショナリズム運動と独立直前に行われた民族統合を取り上げた。ビルマ王国は、三度の戦争で敗北した結果、1886年には、ビルマ王朝の直轄地並びにその周りの少数民族地域が完全にイギリス植民地統治下に置かれ、植民地政府はビルマ人と少数民族が住む平野部と、少数民族からなる辺境地域を別々の行政区分としてそれぞれ「管区地域」と「辺境地域」に分け、分割統治を行った。英領ビルマのナショナリズム運動は、管区地域で起こり、1920年代に至る植民地時代初期のナショナリズム運動は、外国人によって差別されてきた英領ビルマのビルマ人を中心とする仏教徒土着人の経済・教育・社会福祉における利益拡大とビルマ人の意思による自治行政を目標に起きたのである。1930年代からビルマ人の民族運動は初期と違って独立の獲得を目指した。第2次大戦後独立直前には、ビルマ人ナショナリストおよび諸民族の指導者の同意を取り付け、民族統合を行った。この結果、ビルマ人の多くと諸民族が共存している管区地域とシャン人、カチン人、チン人、カヤ人が別々に存在している山岳地域とが合併し、独立時期1948年に、連邦国家を建設したのである。このように、植民地時代早期および独立直前の政治理念が国民形成過程に大きな政治的影響を及ぼしたのである。

第3章では、植民地時代の英領ビルマで確立された現代ビルマ語について検討した。植民地化とともに英領ビルマでは政治・経済・社会が変化し、当時から資本主義の拡張によって、印刷企業による新聞、雑誌などが出版された。当時の出版物は様々な表現法を持ち、ビルマ語の世俗語としての普及に大きな役割を果たしたのである。

このような状況のなかで書き言葉の均一化は、1921年に設立された民族教育によって行われた。上述したようにアミョーター教育は、現代ビルマ語の成立に関与したのである。ビルマ語の公用語化は、第2次世界戦争中の「ビルマ国家基本法」の制定によって新ビルマ国家の公用語として規定されたのがはじまりである。日本軍政権の教育政策によって現代ビルマ語が教育用語としても促進され、さらに日本語を義務科目として教えることを定めたのである。ミャンマーが独立を迎えた1947年には、国家建設憲法の制定によってビルマ語がミャンマー語として公用語と規定され、連邦政府の教育政策を通じてビルマ語が教育用語に認定されたのである。このように独立時期から言語的多様性が現実であった状況に対して、ビルマ語が公用語として構成されたのである。

第4章では、植民地時代における国民形成の過程を検証するため、アミョーター教育に導入された歴史教科書と公民教科書を考察した。1920年代の歴史教育は伝統的なビルマ王朝史を基本にビルマ人の民族意識（ナショナル・アイデンティティ）を高めるため作成され

たのである。そのためこの歴史教科書では、国王とビルマ王国の地位の高さが格別に強調され、国王としては、ビルマの支配層を仏教においてもっとも尊敬されている仏陀の親戚とビルマ人との混血からなる王族という特別存在として想像させ、王国に関しては国王の軍事力によって建設されたビルマ王国時代を3回に分けて3つのビルマ王国を認め、王朝ビルマ時代が執筆されている。換言すると、このアミョーター学校の歴史教科書は、ビルマ人を偉大な過去を持った民族として提示し、民族意識を高めながら、この民族意識を基本に植民地時代の英領ビルマのビルマ人を、王朝時代のビルマに由来する人々として均質な集団に組織化しているのである。

アミョーター学校の公民教育による国民形成は、自治政府の設立を将来において実現するため、学生に公民教育を教え、公民知識を身に付けた国民を形成することである。つまり自治政府を実現するため、公民教育を通じて、人々を一つの均質な国民として形成する教育である。そのため、アミョーター学校の公民教育は、ビルマ王国の植民地化を国王の敗戦に求め、イギリス本国を事例に国家が民主的な選挙を通じて建設されたことを説明しながら、国民の地方行政の選挙での投票や立候補ができる制度を教え、この選挙に参加することが自治政府の設立と関連すると述べている。つまりこのアミョーター学校の公民教科書は、植民地支配下ビルマ人を自分の意志によって行う自治政府の設立を目標とし、自分の意志通りに行政を運営できる均質な集団として組織化しているのである。

第5章では、独立期の歴史教科書と公民教科書を考察した。独立直前には民族統合によってミャンマー連邦が形成され、この理念を基礎に独立後の教育では、歴史教科書と公民教科書育が行なわれた。独立直前の歴史教科書も伝統的なビルマ王朝史を基本にしているものの、1920年代と違って、当時の政治理念である民族統合の視点から書かれている。この教科書では、国民の起源について民族的多様性を指摘し、ビルマ王国は多民族社会であったと主張されている。独立国家の形成に関しては、これを伝統的な民族統合の一つの成果として評価している。言い換えれば、この独立直前の歴史教科書は国民を多民族からなる王国の国民として一つの歴史的認識を与え、過去における民族統合を想像させながら、歴史的な共通性をもつ成員とみなし、均質な集団に組織化しているのである。

一方で、独立期の公民教育の国民形成というのも、第2次世界大戦後の民族統合理念を基本に、現代的国家というのを民族統合の視点から行われたのである。独立公民教科書でも国家に関しては、管区地域と辺境地域を合併した地域を国家の前提にし、国民形成に関しては人間を社会的な生き物として説明している。ミャンマーの国民としては、地元からなる自然的な国民と植民地時代に移住してきた国民になる意志を持つ人もまた国民になることが可能であると述べている。続いて国民は、現代的発展と世界の平和のため国際社会との関係を持つことの必要として一つの「国民」だけではなく、国際社会の一員としている認識も要求されている。つまり独立時期の公民教科書は、民族統合思想を受けながら、ミャンマー連邦の国民形成を目指している。すなわち連邦国家の設立を目標にしながら、多民族の人々を国民として均質な集団に組織化しているのである。

終章では、植民地ビルマにおける国民形成過程を、本稿をまとめる意味で振り返ってきた。上述した議論に関する本論文の結論として、英領ビルマ時代からミャンマー独立国家の樹立にかけて教育による国民形成が行われ、このように行われた国民形成が、アミョーター教育による現代ビルマ語の誕生と、このビルマ語を通じて行われた両時期の歴史教育と公民教育によって形成された共通認識が人々を均質な集団として組織化したと述べた。このように、現代ミャンマーの国民形成の基礎である独立時期の国民形成は、民族統合理念を基礎に、1930年代に作成された現代ビルマ語を用いて、歴史・公民教育による共通認識に通じて現代の国民が形成されたのである。

本研究では、教える方法や受け入れた学生の側まで議論するのができなかった。現代のミャンマー連邦の国民形成を見るのは本研究の課題となる。